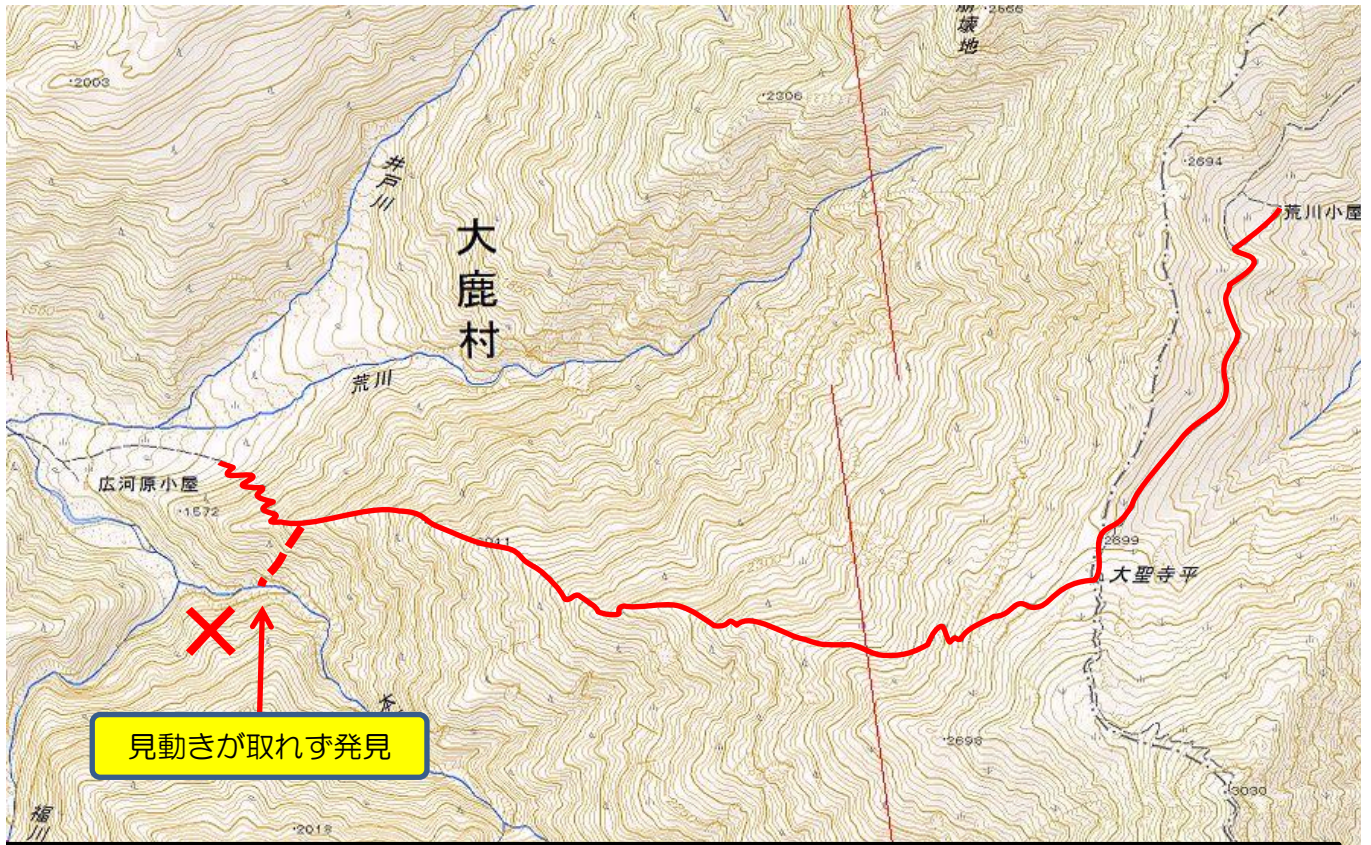


荒川三山遭難(1999年8月)

雨が降っており、地図を出すのが億劫で眼鏡も曇っていた。道の間違いに気付いたが、このまま斜面を下れば目的地の広河原小屋はもうすぐだし、間違えた道を登り返すのは嫌だった。5mほどの滝を飛び降りた時、足を骨折し万事休す。ヘリコプターで発見されるまで、9日間沢の中で耐えていた。



解説

鳥倉林道～三伏峠～小河内岳～荒川三山～赤石岳を目指し、登山届には「下山道は往路を戻る」と記した。荒川小屋で雨が降っていたため赤石岳には登らず、最短距離の小沢に下ることにした。広河原に近くなったところで「あれ？おかしいな」と思ったが、次の瞬間「ルートはこっちだな」と思いこみ、迷い道へ進む。

「①雨降り、②地図を出すのが億劫、③眼が悪い、④薄暗い樹林帯では地図がよく見えない、⑤眼鏡が曇っていた、⑥ルートがジグザグだったので、ショートカットして真っ直ぐ進んだ。」小さな要因の積み重ねである。更に「でも、いいや、広河原までもうすぐだろうから、このまま下りちゃえ」と自分の行動を肯定化する考えが支配していた。典型的な道迷いパターンといえる。

しばらく下ると、本岳沢に出た。人の足跡があったため、大丈夫と更に沢を下って行ったが、いつの間にか足跡は消え、滝が現れた。雨が降っていたので、増水も心配だし、考えたって始まらないので、滝を飛び降りた。すでに冷静な判断はできなかったようである。足を骨折し、救助を待った。

地図をザックに入れ、億劫で見ないために遭難した例は、非常に多い。せめて、主尾根の北側に最終的には広河原への道が付いていると思って進みたい。しかし、ジグザグの道をショートカットして道の無い急斜面を下ったのでは、道に迷うのも頷ける。最初に「あれ？おかしいな」と思った時が、ターニングポイントである。この時に休憩する癖をつけておきたい。「面倒臭い」という言葉(行動)は、道迷いにとって「最大の敵」である。自分にも戒めたい言葉といえる。